

キラリ！築山っ子

文責：本島

「色々な支援を選択できる時代です。」

例年、就学時健診や体験入学などの機会をいただいて、新入生の保護者の皆さんに「特別支援教育とは…」という内容でお話をする時間をいただいています。今年はコロナの影響で、この時間が確保できませんでしたので、在校生の保護者の皆さんにだけでも、昨年度と同じような内容になりますが、お知らせをします。

以前お伝えしたように、玉名市では年に2回「教育支援委員会」が開かれます。以前は「就学指導委員会」と言っていましたが、「支援の在り方を選択する主は保護者」という考え方のもと、保護者の皆さんのが我が子の進路や支援の選択をする場面で適切な情報提供をすることが学校には求められます。

日常生活の中で、あるいは学校生活の中で、子どもたちが困っている様子を適切に捉え、必要に応じて支援の在り方の選択をしていくことは、子どもたちがよりその子らしく育っていくことを応援することにつながると思います。

【通常の学級の中で】

- ① 担任の先生による支援（教室の環境調整・声かけの工夫・視覚的支援・課題量の調整等）
- ② 支援員の先生等による個別の支援（教室の中で）
- ③ 別の教室などで個別の支援（保護者の了解のもと）

【通級指導教室での支援】（在籍・担任はそのまま）

- 自立活動を中心として、生活上、学習上の困難さの軽減を目指します。

【特別支援学級での支援】（教育支援委員会を経て）

- 特別支援学級での支援（より個に応じた支援・環境）
(特別支援学級に転籍します。担任も特別支援学級の担任になります。)

【特別支援学校での支援】（教育支援委員会を経て）

- より整えられた環境で専門的な支援が行われます。

「支援の選択」を大まかに表すと左の表のようになります。それぞれの段階で考えられる支援を進めていきます。特別支援学級や特別支援学校での支援を希望される場合は一定の検査等を受ける必要があります。

県の調査によると、毎年特別支援学級に入る子どもたちが増えていて、学級の数も当然増えていること。「支援の選択」が以前に比べてとても身近なものになっているように感じます。

「通常学級以外の選択をしたい」と考えられる保護者の皆さんや子どもたちがいる時に、その足かせになりがちのが周囲の理解です。特別支援学級



を選ぶのは「〇〇ができない」「指導が大変」だからではなく、「その子がよりその子らしく楽しく元気に学校生活を送る」「得意なことをもっと伸ばす」ためです。入級してくる子どもたち自身がマイナスイメージを持ってしまうと、支援の効果は大きく下がります。私たち教員はもちろん、その子を取り巻く周囲の理解がとても大切になります。

ティーチャース・トレーニング（略してTトレ）に取り組んでいます

ペアレント・トレーニングは耳にされたことがあるかもしれません。行動分析の考え方をもとに、子育てに悩む保護者の皆さんとよりよい関わりについて学ぶものです。この「先生版」です。取り組んでいます…と言っても資料と本島の勝手な解説を入れたプリントを配付して読んでいただいているだけですが(^^;

中身としてはペアトレの基本でもある「行動の前後に目を向ける」「望ましい行動を増やすための注目（褒め）の在り方」などです。「褒め」のコツとして「25%ルール」というのがあります。100%できていなくて25%でもできたら…取り掛かるやる気を見せたら…など、時間はかかりますが、「25%褒め」を継続することで望ましい行動が長続きしたり、行動の好循環が見られたりするようです。

自分の強みってなんだろう？

今年度5回に渡って特別支援教育便りを発行してきましたがいかがでしたか？特別支援教育=特別支援学級のこと…と思われる方がまだ多いようですが、違います。特別支援教育がスタートして10年以上。改めてわかっているようでよく知られていないかもしれない「発達障がい」について考えてみましょう。例えば…

自閉スペクトラム症：①社会性（対人関係）の困難さ ②コミュニケーションの困難さ ③想像力の困難さ（主にこだわりの強さなど）の3点が主に上げられます。診断基準をもとに医師によって診断されます。

以前は自閉症・アスペルガー症候群・高機能自閉症・広汎性発達障がい…など同じ自閉症でもいくつかに分類されていました。現在はスペクトラム=連続体（虹のような）と捉えられています。

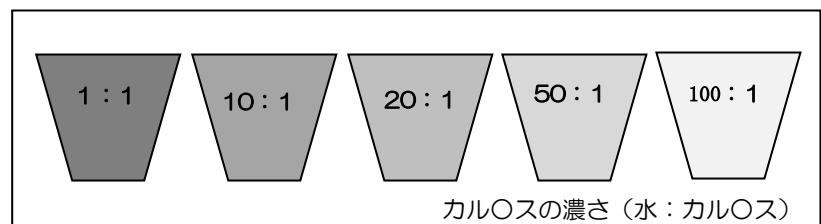


注意欠陥多動性障害（ADHD）：年齢あるいは発達に不釣り合いな注意力、及び/又は衝動性、多動性を特徴とする行動の障がいで、社会的な活動や学業の機能に支障をきたすもの…とされています。

学習障害（LD）：基本的には全般的な知的発達に遅れはないが、聞く、話す、読む、書く、計算する又は推論する能力のうち特定のものの習得と使用に著しい困難を示す様々な状態を指す…とされます。

支障をきたす…著しい困難…。どこからがそうなのか、こちらも判断が難しい気がします。物的環境、人的環境も関係しそうです。

「スペクトラム」と表現されるように、その状態は様々です。「カルロス」の濃さで説明されることがあります。どこからどこまでが発達障がいと言われるでしょう？こうして見ると、実は一部の子ども（大人も）だけが発達障がいと言われるのではなく、ほとんどの人がうっすらとその特性を持っているように思えます。



以前「大人の発達障がい」について研究している方が、数名の大人を対象に「発達障がいチェック」をされたことがあります。実は私も受けました。一緒に受けた方が、「〇〇さんは視覚優位の『傾向』がありますね。」「△△さんは継次処理が得意なタイプのようですね。」などとチェックの結果からその傾向を伝えられます。（「視覚優位」は目から入る情報による理解が得意。「継次処理」は、順序立てて考えて物事を進める。反対は「同時処理」で、まず全体像を見て考える）

さて、私の番。「本島先生は…特にこれといった傾向はないですねえ…。」と言われてガッカリ。私のガッカリは何なのでしょう？おそらく多くの人に何らかの特性（「傾向」と言われることもありますね。）があると思います（私見です）。その特性を正しく育て活用できればそれはその子にとってすごい強みになりそうです。私にはその「強み」がない…と言われたみたいでガッカリしたように思います。発達障がいのある子について考えると、発達の凸凹があるだけに余計に強みの部分が際立ちそうです。ただ、周囲が正しく理解せず、その子が困っている「弱み」（学習を難しくしてしたり、行動を乱したりしている）にばかり目を向け、注意や叱責ばかり与えていたら、この強みは表に出てこなくなるかもしれません。

有名な話ですが、映画俳優のトム・クルーズはLDのため文字が読めなかつたとか。もし周囲が「文字が読めない」ことにはばかり目を向けていたら「トム・クルーズ」にはなっていなかつたかもしれません。強いこだわりがあるからこそ何か一つのことに集中する力になるかもしれません。じつとしていられないほどの行動力は将来バイタリティ溢れる働き手になるかもしれません。

障がいのあるなしに関わらず、マイナス面だけに注目して自己肯定感を失わせていくのか、特性を有効に生かすことに目を向け、その子らしくより良く生きていける道を見つけさせるか。私たち教師や大人の責任は大きいですね。



今年も1年間お付き合いいただき、ありがとうございました。今回の内容にも関わりますが、気になる子どもたちをどのように捉え、どう関わっていけばいいのか…を保護者の皆さんと考えていく場として、来年度は「子育て学習会」を復活させたいと思っています。新型コロナの収束を心から祈っています。

